

N-4 石巻市牡鹿町新山浜地区 2012年2月9日(火)

報告者名	高倉 浩樹	被調査者生年	① 1950年(男)、② 57才(女)
調査者名	高倉 浩樹	被調査者属性	① 区長、漁師、② 話者①の妻、主婦
補助調査者	沼田 愛		

話者について

話者①はこの家の3代目にあたる。新山区長を務めて今年が2年目にあたる。職業は漁師で、漁師になって50年ほど経つがまだ一人前ではないと思っている。話者②とともに出漁する。息子(3人?)が石巻市内に居住しているが、いずれも別居である。

調査地の概要

新山浜は、牡鹿半島の北岸に位置する約30戸の集落である。新山浜の西隣が泊浜、東にいくと鮎川浜である。新山浜は40、50年ほど前まで、海図にも浜の位置が載っていなかった。牡鹿半島には浜が複数存在するが、以前は言葉のイントネーションが浜ごとに異なっており、会話でどこの浜の住民か予想することができた。

話者②は小網倉浜の出身であるが、結婚するまで新山浜の存在は知らなかった。その要因のひとつは、通学区が異なることである。小網倉浜・小淵浜・給分浜・泊浜は大原学区であるが、新山浜は鮎川学区であった。

新山地区には以前34、35戸が居住していたが、その後減少している。話者は30戸程度と認識しているが、母子家庭や二世帯での居住が登録上では何戸とされているのか、正確な戸数は年度末にならないと行政から教えてもらえない。人口は70人から80人の間くらいで、高校生になると通学の都合で浜を離れる。

新山浜には商店がなく、週に2回鮎川から移動販売車が来る。銀行や郵便局、生活用品の買い出しなどには鮎川に出向いている。買い物は自分で鮎川まで行くこともあるが、誰かが行く際に自分の買い出しも頼む場合もある。

震災後の状況

東日本大震災による新山浜の被害はほかの浜に比べて軽微なもので済んだ。新山浜では死者は出ず、大規模な家屋の倒壊等もなかった。電気は止まっていたが、水道とガスは使用でき、家屋が無事であったことから食べ物にも困らなかった。電気も発電機を持っているひとに借りられたため、大きな問題にはならなかった(充電などをさせてもらったということか?)。墓地にも大きな影響はなかった。しかし船は津波の被害を受けた。

新山浜は地盤が固く、話者の家でも家屋内にもものが散乱するような状態にはならなかった。地震発生時、妻は小網倉浜にいたため、実家の家の中にもものが散乱し、更に津波にあって泳いで生

還した経験を持つ。話者②が新山浜に戻った時、家の中がほとんど散乱していなかったのが驚いた。

しかし県道が崩れたため、区長は酒を飲んで勢いをつけてから、市役所に補修の話を持ちかけにっていた。勢いをつける必要があったのは、他の部落（浜）に負けたくないからである。

震災後は生活の拠点を新山から石巻中心部に移す家もある。これは新山の集落自体には東日本大震災での大きな被害がなかったものの、浜に停めていた船が津波で破損し、漁に出られない状態が続いているからである。現在では中学生2人を残し、ほかの中学生がいる世帯は新山浜を離れている。ただし、新山浜に居住しているという籍は残し、生活拠点を移しているだけである。これは籍を新山浜から移すと、新山浜から出漁できないからである。したがって父親は出漁するために、組合にも籍を入れたままにし、家族は石巻中心部で生活をする、という状態の家がある。現在集落のなかで一番若い人は25-26歳ぐらいだという。

また、震災後は銀行の利用などに際しては渡波まで行かなければならなくなった。区長は部落の金を預かっており、必要なものを購入するためのお金の引き落としなどは、漁協組合の新山浜支所を利用していた。しかし現在は漁協から脱退しているため、銀行を利用している。そのためお金の出し入れをするのが不便になった。移動販売車は仮設住宅をまわることを優先しているため、新山浜にはあまり来なくなり、結果として話者②は利用しなくなった。

台風の影響

東日本大震災での被害が大規模ではなかったのに対し、平成23年9月頃の台風の被害は大きかった。新山浜内で車が17台流されている。これは話者①の家の裏の山から雨水が洪水のようになって、新山浜の集落を貫通する道路（生活センター南側の道路）を流れていったからである。新山浜は平地が少ないため、この道路に駐車する家が多かった。よって洪水で車が順に押し流されていったのである。

話者②も山からの水が家屋に入ってこないか怖かった。新山浜のほかの住民も、避難所になっている生活センターに集まろうと、区長である話者に解錠するように電話で頼んできた。そのため彼は生活センターを解錠しに行ったが、生活センター前の道路が冠水していたため、住民が集まりたくても集まらない状況であった。最終的に生活センターも床上浸水し、土砂が堆積した。台風が去って雨が止むと、山から流れて来ていた水もピタッと止まったため、話者②はそれが不思議で怖いと感じた。

新山浜の社会組織

新山浜の住民が集まる組織としては、漁業組合・実業団・婦人会・老人会などがあったが、漁業組合以外は解散している。実業団では毎年2月1日が総会で、前年に不幸があって正月を迎えられなかった家は、この日に小正月として正月を迎えた。

現在は新山行政区として総会などを行っている。行政区の総会（集会）は毎年1月16日で、このときにほかの行事の日程などを決定する。曜日に関わらず、1月16日が総会の日と決まっている。各戸から月1千円、年間で1万2千円を集め、それを行事などの経費としてあてている。

昨年までは、毎年2月28日に、村栄（むらさかえ）という行事を行っていた。これは60歳

になった男性に対して、「定年」としてもてなし、共同飲食することである。以前は手作りの赤飯や自分たちが獲った魚を調理して食べていたが、その後オードブルを頼むようになった。一人分の飲食費として5千円程度かかる上に、手伝いをするひとにお金を渡さなければいけないため、村栄は経費がかかるということで今年から止めることにした。手伝いのひとにお金を渡すのは、仕事を休んで手伝わせることになるからである。このような村栄にかかる経費は、部落の金から支出していた。

昔は区長・班長の奥さんがこのような時に料理を作っていた。自分から下の世代の場合、奥さんが手伝うときに「ただ」というのはない—そういう雰囲気になっている。

漁業

新山浜の住民は、林業を営む1軒をのぞいて漁業を生業としている。新山付近の海は荒く、他の部落（浜）で10回漁に出れるとしても、新山浜では1回出漁できる程度であった。それほど天候が良い日でないと出漁できない。

新山浜では個人が獲りたい魚を狙う漁をする形態が一般的である。カレイを狙うひともしれば、アワビを狙うひともしる。同じ刺し網でも何をとるのかによって漁法の違いがある。したがって一緒に漁に出ることはなく、「まとまりがつかれない」ことから、共同での作業も必要とする養殖は行われていない。新川の海は荒く収穫物が波にさらわれてしまうことも、新山浜での養殖が根付かない理由である。鮎川で（「ヨソの海を借りて」）ワカメの養殖を行っていたこともあった。ケンカはしないが、カップと長靴を履いて（漁に出る装いになり）海に出れば、新山浜の住民同士とはいえライバルである。このように自分の「部落」はまとまりは悪いが、人形様の行事だけは別で皆で共同して行う。

震災によって船が破損したため、現在は共同採捕というかたちでアワビなどを獲り、必要経費を抜いて、のこりを地区住民で平等に分配するシステムをとっている。生活の基盤がないのに住所を移さないのはこのためである。そのほかにかれきの撤去作業などにも参加している。自分の船で漁に出れないため、週末は石巻の息子の所に泊まりに行くなどして時間をつかっている。

話者①は現在小型船を北海道の造船所で注文している。小型船の値段は500万円くらいだが、以前と同様に漁をするためには、GPSなどの機械を取り付けなければならないので、更にお金がかかる。船が破損して最も痛手なのは、GPSが壊れたためそれに記録してきた漁場の位置などのデータが消えてしまったことである。30年ほど前までは山あてをして船の位置を図っていたが、GPSの機械を導入してからは、それに頼っていた。したがって新たな船が到着したら、GPSにデータを入れ直さなければいけないのが大変である。船の制作については3分の1は自己負担。

同じ部落のなかで魚種の選択はかぶさらないようにしている。たとえば同じ刺し網でも、カレイなど底物と泳いでいるものでは違う。ただしタコなどはかみ合うこともある。部落内の人の関係だが、「仲よくはしない、みなライバルだから」、すこしは譲り合いをする。しかし普通は特に協力するわけではなく、みなそれぞれやっている。

かつては個人で船を出し、それぞれが自分で採集するものを決め、アワビ・ウニ・ホヤ・カレイなどを獲り、鮎川で卸した。若い漁師の場合は、各漁港での相場をみて、気仙沼漁港など鮎川以外の漁港に卸すひともしる。

話者②は震災前まで、朝に弁当を持って出漁し、昼は釣り上げた魚を船の上で調理して昼食とするのが、漁の楽しみだった。魚が釣れないときは、ほかの船から分けてもらった。携帯で電話して分け合って食べるのが普通だと思っているので、自分も釣れたらほかのひとにあげる。しかし、これからは小型船になるため、船上では魚を調理するのも難しいだろう、と楽しみがなくなることを残念に感じている。

港から徒歩でとれるものに「ふのり」がある。「人にとられたりすると頭にくる」という。テトラポットからあるいてとれるという。

・信仰と八鳴神社の火祓い・カンカンサマ・シシフリ（獅子振り）

船はお産を嫌うと言われている。そのため、家族から誰かが出産をしたら、3、4日間出漁しない。漁師だけではなく、船の機械を扱うひとも同様である。また、ヨソの船に行って漁をするひとの場合も漁を休む。

また、話者①は以前、次のような話を聞いている。かつては新山浜の海岸にある小祠（正式名称未調査）の前を通る船は、小祠に御神酒をあげる真似をして、手を合わせて拝むようにしていった。新山浜の住民ではなく、ほかの浜の漁師がこのようなことをするのは、海難があった際に新山浜の周囲で助けられたりしたなど、何かしらの理由があってであるという。これについて詳細は分からない。

八鳴神社の祭礼は10月に行われる。10月25日が前夜祭で、このときに火祓いとして、神社の前に穴をほり、木材をくみ上げて火をつけ、燃え尽きるまで燃やした。風があっても火祓いの火で火事になったということはないと聞いている。

話者①は相棒（と呼ぶ男性）と木材を組む作業を若年のときからやってきたが、木を組む作業は難しい。現在はまっすぐな木を選んで切ってくるため、組み上げたときに隙間ができにくい。よって煙の抜ける穴をうまく作らないといけない。たまに組み方が上手くいかず、点火しても上手く燃えないときがあった。その際には灯油をかけるなどして、もう一度点火しなくても燃えるようにする。

火は夜の12時頃まで焚くが、火の番は神社の近くの住民が行った。他の人は酒を飲んで寝てしまう。以前はカラオケをしたり、太鼓をしたりすることもあったが、今年は子どもがいないため行っていない。賽銭だして、火にあたって終わりだった。

話者①の家の東側に、カンカンサマと呼ばれる小祠が建てられている。カンカンサマにはまつりはないが、新山浜のひとたちで祀っている。

正月になると、各家で船に供え物をしに行く。また、シシフリ（獅子振り、もしくは獅子舞とも呼ぶ）があって、獅子が新山浜の家を一軒ずつまわっていた。その後各戸をまわらずに生活センターで演じるようになったが、シシフリをするひと（獅子まわしをするひと）がいなくなったので、それも行われなくなった。

今後に対する不安

3月に船がきて漁をはじめの予定。船が到着するのは楽しみだが、1年間漁に出ていないため、からだ慣れるかどうかという不安もある。「生まれたときから漁師だからな」といいつつも、1年間休んでいるから体がついていくか心配だという。